

童謡の研究 (一)

柴田 奈美

はじめに

北原白秋の児童雑誌「赤い鳥」における業績は、次の三点にまとめられる。

- 一、創作童謡の発表。
- 二、投稿童謡の選出と選評文の執筆。
- 三、読者から募集した「地方童謡」の選出。

本研究では、右の「二」の業績に注目し、白秋の童謡観を考察したい。

投稿童謡の選出とその選評文の執筆は、創刊号から白秋が「赤い鳥」を離れるまでの、昭和八年四月号まで続けられた。この間、次のように、その形式は変化している。

- 大正七年創刊号～同八年三月号
大人の作品と子どもの作品とを区別なく選出、発表。
- 大正八年四月号～同十年十月号
大人の作品を「入選創作童謡」、子どもの作品を「入選自作童謡」とし、区別して選出、発表。
- 大正十年十一月号～昭和八年四月号
子どもの作品については、「自作自由詩」という用語に変化。

このような変化をなすに至った背景には、白秋の童謡観に変化のあったことが考えられる。そこで、白秋の童謡論を考察していくが、まとまった童謡論を書くのは、大正八年九月の『とんぼの眼玉』以降であり、「赤い鳥」の通信欄において、随時童謡論を述べていたことから、その点を「赤い鳥」の通信欄に執筆された「選評文」、及び「童謡募集欄」を中心資料として考察したい。

本稿では、大正七年創刊号から同八年十二月号までの「赤い鳥」（近代文学館復刻版）を中心資料とし、大人の作品と子どもの作品とを区別しない時期から、区別をし始める移行期の、白秋の童謡観の変化について考察したい。

一、「赤い鳥」創刊号と白秋

「赤い鳥」の主宰者鈴木三重吉は、「童話と童謡を創作する最初の文学運動」と題する「赤い鳥」創作のプリントに、「赤い鳥」の編集方針、態度、抱負を述べている。その一部を次に引用しておく。

□私は、森林太郎、泉鏡花、高浜虚子、徳田秋声、島崎藤村、北原白秋、小川未明、小宮豊隆、野上白川、野上弥生子、有島生馬、芥川龍之介の諸氏を始め、現文壇の主要なる作家であり、また文章家としても現代第一流の名手として権威ある多数名家の賛同を得まして、世間の小さな人たちのために、芸術として真価のある純麗な童話と童謡を創作する、最初の運動を起したいと思ひまして、月刊雑誌『赤い鳥』を主宰発行することに¹⁾至しました。

□実際どなたも、お子さんの方の読み物には随分困つておいでになるようです。私たちもただ今、世界に行われている、少年少女の読物や雑誌の大部分は、その俗悪な表紙を見たばかりでも、決して子供に買つて与える気にはなれません。こういう本や雑誌の内容はあくまで巧利とセンセーショナルな刺激と変な哀傷とに充ちた下品なものだらけである上に、その書き表し方もはなはだ下卑でいて、こんなものが直ぐに子どもの品性や趣味や文章なりに影響するのかと思うと、まことに、にがにがしい感じがいたします。西洋人たちがつて、われわれ日本人は哀れにもいまだかつて、ただひとりも子どものための芸術家を持つたことがありません。私どもは、自分たちが子どものときに、どんなものを読んできたかを回想しただけでも、われわれの子どものためには、立派な読物を作つてやりたくありません。また現在の子どもが歌っている唱歌なども、芸術家の目から見ると、実に低級な、愚なものばかりです。次には単に作文のお手本としてのみでも、この『赤い鳥』全体の文章を提示したいと祈つております。なにとぞこの運動に対して、みなさんからの御高教

と御助勢をいただきたく、折入つてお願い申します。

このような、三重吉の編集方針、態度、抱負に共鳴して、白秋は「赤い鳥」運動に参加し、童謡欄を担当していくこととなる。

ここで、「赤い鳥」に参加した当時の、白秋の童謡に対する認識はどの程度であったのかを、白秋の言葉を引用しつつ、明らかにしておきたい。

私の童謡復興の運動は今日に始まつたのではない。少くとも日本の民謡乃至童謡の精神と形式とを詩の中に取り入れ、根本にその基礎を置いた事に就いては、私は私としてのいささかの自信は持つてゐる。またそれ丈の事は事業に於て証し得ると信ずる。この自覚の上に立つた創作は十数年前から引き続いたが、殊に鈴木三重吉君の手から発刊された童謡童謡雑誌「赤い鳥」誌上に於て、童謡方面を担当して以来、改めて私は私の創作上の精力をこの童謡のために専ら集注した。一方童謡の啓蒙と開発とに奮ひ起つた。

（「童謡復興」）「芸術自由教育」大十・一・二月号 『緑の触角』所収^註

このように、民謡・童謡の精神とを詩の創作の根本に基礎を置き、その自覚の上に立つた創作を、「赤い鳥」創刊以前に何年も続けて行つてきたことがわかる。「赤い鳥」における童謡の啓蒙とその開発に着手した時点で、既に「童謡の精神」というものをとらえていたわけである。片手間として童謡童謡を創作していた作家の多かった当時に、白秋は芸術としての童謡を目指して、純粋な童謡の創作と啓蒙・開発に奮い立った点が注目される。

そして、この「赤い鳥」の童謡欄への意気込みは、その後も変わらず、次に述べているように情熱を傾けたものであった。

赤い鳥は三重吉後半生（シンボル）の象徴そのものであったと同時に、不肖ながら白秋此の私の分身の映像でもあった。（「赤い鳥の詩運動（一）」）『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号』赤い鳥社 昭十一・十・一

また、「童謡作家として立つて以来、私のとった頭正の道は一に新童謡の創作と提供、二に児童自由詩の宣伝とその開拓、この二つであった」（「睿智と感覚」）「大観」大十一・一月号 『緑の触角』所収）と述べているように、自己の童謡創作と並んで、児童自由詩（童謡から分化したもの）の宣伝とその開拓という、指導の面にも力を注いでいたことが明らかである。

このように、文学としての童謡に深い理解と情熱を、「赤い鳥」創刊当時よりもっていたことを確認した上で、次に、各号の白秋の選評文、及び童謡募集欄を読み、考察していきたい。

二、白秋の童謡観

① 創刊号

創刊号の選評文には、次のようにある。

（前略）「鳥の櫛」は、ほんとに可愛らしい、いい謡です。寂しい秋の山里や、木の実拾ひの子供達が目に見えるやうです。おくみさんが可哀想ですね。「かたぎの実」の、拾ふはしから／＼落ちる実は、とりもなほさず、あはれな病ん目の子守の悲しい心持でせう。可哀想な何だか寂しい謡です。

参考のために、「かたぎの実」を引用しておく。

かたぎの実

榎田 濱吉

いつちん、かつちん、櫛かたぎの実、

病目やまめの子守が来て拾ふ。

拾ふはしからまた落ちる、

いつちん、かつちん、櫛の実。

うしろのお山に日が暮れた。

このように、伝来の日本の童謡の情緒を踏襲した、「可哀想な何だか寂しい」

感じのところが評価していることがわかる。

もっとも、これらの作品は、後年白秋が「その初めに投書無き為、私と私の周囲とが匿名を以て投書の童謡をも作成した」(『赤い鳥の詩運動(二)』)『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号』赤い鳥社 昭十一・十・一)と述べており、白秋、あるいはその周囲の人間の創作である。しかし、どちらにしても、このような童謡を佳しとしていた、白秋の童謡観は窺い知ることではある。

先に引用した「童謡復興」の中で、「日本の民謡乃至童謡の精神と形式とを詩の中に取り入れ、根本にその基礎を置く」。「この自覚の上に立った創作は十数年前から引き続いたが」と述べていたが、その考え方が、創刊号の選評文から窺われることが指摘できる。

一方、「創作童謡童謡募集」欄には、「これは直接購読者以外のお方からも広く募ります」とある。この欄の書き方にも、号を重ねていくうちに変化が見られるので、随時指摘していきたい。

② 大正七年八月号(第二号)→大正七年十二月号(第六号)

第一巻第二号の「通信欄」の記述は、急激に増えている。これは、募集作品が多く集まったためと考えられる。

(前略)「青鳩」はいかにも夕方のお寺の森らしくて、蚊のうなりや青鳩の啼き声が聞えるやうです。(中略)同君の鴉の唄は在来のに即き過ぎてゐて却て劣ります。横田君の「鳥」は(中略)いかにも子供らしく単純に語へてゐます。(中略)加藤君のが揃つてゐます。併し少々大人くさいやうに思ひます。川上千代子さんの「夢のお鈴」は無邪気な唄です。百瀬君の「つばめ」は軽快に出来てゐます。燕のやうに飛んでゐます。山田早苗さんの「ランブ時計」は可愛いものですが、もつと言葉を砕いて欲しかったです。芝君の「一つ鴉」は子供らしいところを取りました。

このように、まず、作品ごとの選評を行っている。ここでの白秋の指摘をまとめると、次のようになろう。

- (1) 表現が写生的であること。(「青鳩」)
 - (2) 子供らしい、単純、無邪気な感じのすること。(「鳥」「夢のお鈴」「一つ鴉」)
 - (3) 在来のに即き過ぎぬこと。(「鴉の唄」)
 - (4) 大人くさいのはよくない。(加藤君の作品)
 - (5) 言葉を砕くこと。(「ランブ時計」)
- さらに、右の選評に続けて、次のようにまとめている。

童謡は昔から子供がしぜんと歌ひ出したものは実にいくつがあります。大人が子供のために作つたものは、どうも大人臭くていけません。思ひきり子供になつて簡単に歌ふことです。さうして深みのあるのが理想的です。子供の観る自然は凡て幼くて清新で驚きに満ちてゐます。調子ばかりが童謡風になつても内容が大人くさくては何にもなりません。すっかり子供に還つて歌つて下さい。(後略)

このように、まとめとして、特に「大人くささ」をよくないこととし、子供になりきつて作ることの大切さに力点を置いていることが指摘できる。

この第二号に見られる指摘は、第三号以降にも、次のように繰り返し見られる。

○ 大島君の「ぼつぼどり」は素朴でいい。藤岡さんの「虹」は無邪気です。

(第三号)

○ 「蛙」は簡潔な中に原始的な幼なさや無邪気な笑ひとがあり、「蟹」は玉のやうな子供心が非常に純真な言葉で現はれてゐます。(第四号)

○ 「お星さん」は非常に独創に富んだものです。いかにも子供の驚異と感覚とが光つてゐます。(中略)素朴です。「きつゝきさん」も素朴で特殊な清新さがあります。(中略)並木君の「おかあさまのお国」も無邪気です。

(第五号)

○ 「天の川」は伝習を離れた新鮮さがあり。詩啓緒君の「ポスト」はいかにも子供らしくて罪がなくていい作です。(第六号)

このような観点で選を行ってきた結果、大正七年十二月号の第六号の通信欄に

は、「総じて次第にいゝのが集つて来るやうで私も喜んでゐます」とあり、創作童謡欄が軌道に乗ってきたことが窺われる。

次に、「創作童謡童謡募集」欄の変化について、指摘しておきたい。

「第二号」では、「これは若き作者から広く募ります」とある。前号の文に比べて、「若き作者」という条件が加わっている。

しかし、次の「第三号」以降は「すべての方から広く募ります」と、条件は削られているので、「第二号」での変更の意図は不明である。

追加された内容としては、「第三号」から「特に幼稚園以下の子供の使ふだけの言葉で、それらの子供たちが容易に謡ひ得る、やさしい謡を募集します」があり、これは大正八年九月号まで続く。

この意図は、幼稚園以下の子供に童謡を与えるということはもちろんであるが、今まで、見てきたとおり、投稿者の作品に大人くささがあり、「思ひきり子供になつて簡単に謡ふ」（第二号）ようにさせるための方法として、具体的に「幼稚園以下の子供の使ふだけの言葉」という条件を明示したのではないかと思われる。

③ 大正八年一月号（第一号）～大正八年三月号（第三号）

「第一号」の通信欄では、今までと同じく単純、純真な作風で、子供の気持ちになりきれた点を評価した選評文である。

（前略）「卵」を推奨します。（中略）飛び出して来る卵が目に見えます。

（中略）浅川君の「金の車」は先月のよりずっと単純でよくなつてゐます。

（中略）佐藤君の「霜」は純真なものです。小島君の「私のお舟」、詩啓諸君の「雨」、木村君の「好きな人」は罪のない素直な子供の気持ちになつて歌つてあるのがいいのです。

これが、「第二号」になると、従来の批評に加えて、次のように、感覚的に優れた表現、新しさという点に着目し、評価していることが指摘できる。

（前略）「白い雲」はいかにも子供の天真が溢れてゐます。白饅頭とか白い前掛とか、その仮白い雲になると思つてゐる無邪気さが何とも言へません。（中略）「林檎」はいかにも真赤な林檎が生きてゐるやうです。感覚的にも優れたものです。（中略）河津君のは極めて感覚的に歌はれてゐます。（中略）「雀」は無邪気です。長田君のは鋭い。火が出るやうです。これもいゝものです。山田君のも在来のに比して新味があり、金子君のも鋭い皮肉とユウモアとがあります」

第一号、第二号の通信欄に、共通して強調されていることに、「模倣の排除」がある。第一号では「模倣がかなり流行しますが、あれは一つおやめにしたいのですね」と述べ、第二号では「どんなに巧妙な作品でも模倣し過ぎたのは取りません。なるべく独創的なのを、少々はまづくとも選ぶことにします。兎に角大分模倣が流行しさうなので注意しておきます」と述べている。

このように、模倣の作品が多いという実状を踏まえて、第三号では次のような選評文が見られる。

童謡の作者は子供時代の純真な感情や感覚をいつまでも忘れないでゐられる人でなければなりません。たゞ大人の詩を作るやうな気持だけでは失敗します。もと／＼童謡といふものが、子供の感情から自然に生れて出た言葉なり謡なりですから、ただ詩らしく作り過ぎてはいけません。全然子供になつてしまふことが必要です。気が利いてるやうでもまやかしのものが随分あります。さういふ詩は子供たちにはあまりに分別くさくていやなものです。（中略）童謡は子供やその周囲を材料にした詩ではなく、子供の感情がそのまま謡はれてゐるものでなければならぬことです。

これまでも、子供の気持ちになりきつて謡うことの大切さを説いてきた白秋であるが、この時期では、具体的に「子供時代の純真な感情や感覚」を表現することを説いている点が指摘できる。そのため、個々の作品に対する選評文にも、感

覚的・感情的表現のよい点を評価したものが多くなったものと考えられる。「第三号」にも、次のような選評文が見られる。

(前略)「青い果」を第一に推奨します。極めて感情的でいいと思ひます。それから山田君の「朝」を推奨します。これは極めて感覚的です。そして電信柱の風景が簡素で清新です。

以上の選評文に加えて、同じく「第三号」に、次のような白秋の童話観が述べられている。

(前略)無論童話は歌ふ話でなければなりません。尤も話ふと言っても唱歌のやうに作曲された上て話ふといふのでなく子供心の自然な発露から、とり／＼どりに自由に話ひ出すといふ風なのが本当でせう。それは極めて単純な節廻しです。兎角私達の作るものは六つかしくなり過ぎます。(中略)異国趣味のものも在来の日本の童話に更に別種の新味を与へることは十分の価値を認めますが、趣味だけではいけないのです。全然それを自分のものにし自分の子供心に融かし込んでしまつた上で、自然に流れて出てくれなくてはたゞ彩色の綺麗なブリキ細工の玩具のやうになつてしまひます。あのハイカラな新式の玩具と原始的な雅味のある古い玩具とを較べて御覧なさい。童話は殊に素朴であらねばなりません。(中略)いろいろと諸君の研鑽を俟つて、私もみつちりと、古い雅味の失せない、さうして更に新しい趣を加へた新日本の童話を大成したいと思ひます。

童話は自然に子供たちが口ずさめるもの、また、素朴で古い雅味の失せないもの、という童話観を打ち出す一方で、「創作童話童話募集」欄には、次のように大きな変化が見られる。即ち、「少年少女諸君、これからは、みなさんからも、綴方のはかに童話と童話を募ります。勝手な話やお話などをどンドン作つてお越し下さい」と、子供にも投稿を促す文章が、追加されているのである。

こうした子供への呼びかけを行うに到ったいきさつについて、白秋は「赤い鳥

の詩運動(二)」(前出)の中で、次のように追想している。

(前略)一般の応募童話が次第に山積し、新童話運動の機運が愈々醸成されるに到つた。その間に、児童自身作るところの童話の投書が之等に混淆し来つたのも自然の趨勢であつた。私は此の発見に驚いて、改めて成人以外の児童作品欄を設け、その投書を慈憚した。

「私は此の発見に驚いて」とあるように、白秋は子供の作品を初めから期待していたわけではなかった。

これまでの白秋の童話観は、大人が、自分の子供時代の純粋な感情や感覚を思い出し、自分の子供心に溶かし込んで素朴に話つたもの、という「大人」主体の考え方であつたが、大人の作品の中に混在している子供の作品を発見し、子供による創作童話はどんなものになるか、一つの試みとして行つたものと考えられる。

④ 大正八年四月号(第四号)～大正八年十二月号(第十二号)
第四号には、子供の作品に対する選評はなく、次のように、従来通りの大人の作品に対する選評のみである。

(前略)何か珍らしい見つけものや魔法の事柄をうたふよりか、子供の純な感情をそのまゝ歌ひあげると言つたものが本当のやうです。(中略)よほど真純な心に還らないと本当の童話は歌へません。(中略)珍奇なものは一度見た時は如何にも面白いが、二度三度と読むうちにしぜんと興がさめてしまふものです。いつまでもいつの時代の子供の心にも通ふやうなものでなければなりません。

子供の作品に対する選評が始まるのは、次号の第五号からである。第五号から第十二号までの子供の作品に対する選評文を引用し、白秋の子供の作品への評価がどのように変つていったかを明らかにしたい。

○「子供達の作品の中で、かなりすぐれたのがあるのには驚きます」「無邪

「粗野なやうで生々としてゐます」「どれも面白いです」
(第五号)

○「少年諸君のはどれも濺刺としてゐます。どちらかと云ふと、大人のよりずっと、今度は成績がよいやうです」(第六号)

○「だんだん諸君がよくなつて来ます。どうしても童謡は子供たちのものです。大人のよりずっと本物です」(第七号)

○「『崖の家』は童謡風ではないが、子供の詩として、素直な、少しも氣どらないで思つただけ見ただけのものをそのまゝ飾らずに歌つてゐます。それがいいのです」「皆さんのがだんくよくなるのがうれしいと思ひます。どうぞしつかり正直なを作つて下さい」(第八号)

○「皆さんがだんくよくなるので、私もうれしく思ひます」(第九号)

○「子供諸君のは(大人の作品と)比較してずっとよかつたやうです」(第十号)

○「少年少女たちの自作の童謡は、いよく目立つてよくなりました。實際驚いてしまひます。かういふ風ですと、これからどんなによくなるかしれません。投稿もずるぶん多くなりました」(第十二号)

このように、号を重ねるに従つて、子どもたちの作品が、著しく上達していったことがわかる。それらの作品には、作為のない、子供らしい元氣、無邪氣さが表現されており、白秋が「どうしても童謡は子供たちのものです。大人よりズット本物です」(第七号)と述べるまでに到つた。

このことから、この時期に、白秋の「童謡観」の中心となる「子供観」に、次のような変化のあつたことが指摘できよう。即ち以前は大人が自分の子供時代の純粹な感情や感覚を思い出し、自分の子供心に溶かし込んで素朴に詠つたものと考へていたように、「子供」とは、ある理想化され、概念化された「子供」であつた。それが、現実の子供たちの作品に触れることによって、子供は大人以上の、本物の童謡を作ることができることを発見し、現実の子供を直視するに到つたと考へる。

ちょうどこの時期の、大正八年九月に刊行された『とんぼの眼玉』序文を引用

し、童謡観をどのように述べているかを明らかにしておきたい。

私の童謡は(中略)素朴な混り氣のない子供の感覚といふこと、さうした濺刺とした感覚に根ざしたあるものから素裸な子供の心を直接にうつ、さうしたものゝと心がけて居りますのです。

ほんたうの童謡は何よりわかりやすい子供の言葉で、子供の心を歌ふと同時に、大人にとつても意味の深いものでなければなりません。(中略)あくまでもその感覚から子供になつて、子供の心そのまゝな自由な生活の上に還つて、自然を觀、人事を觀なければなりません。

子供の感覚が、どんなに鋭く、新らしいか、生きてゐるか云ふ事について、一例をあげますと、(中略)

子供の感覚は生きて動き、大人の感覚はその智慧から先づ盲にされて死んで了つてゐます。(中略)

子供に還ることです。子供に還らなければ何一つこの泰い大自然のいのちの流をほんたうにわかる筈はありません。

(中略)私たちから先づ、その子供たちのさうした歌ごころを引き出してあげる事も必要だと思ひます。さういふ心で私は童謡を作つて居りますのです。

ここでも、現実の子供の感覚のすばらしさを述べ、大人はその子供の感覚に還つて童謡を作り、子供たちの歌ごころを外へ引き出す必要を述べている。

「赤い鳥」に子供の童謡欄を設け、指導に力を入れたのも、こういう意図があつたものと考えられる。

次に、「創作童謡童謡募集」欄の変化について述べておきたい。

「第五号」から「童謡の曲譜募集」の欄の加わつてゐることが、目立つた変化である。これは、「赤い鳥」の一般読者からの投書を載せた通信欄に、次のような要望が寄せられ、その声が大きくなつたためと考へられる。

○「毎号一つ宛位、童謡に曲譜を附けてほしいです。作曲を募集してもいいでせう」(大阪市、西田董五郎)(大正七年第十号)

○「私の友人も」「子供を自分の寺へ集めて『赤い鳥』に載ったお伽話をし
てやつてゐますが、童謡をうたふのに困ると言つてゐました」「私も」「旨
く行かないので非常に困ります」「童謡には曲譜を附けて欲しいと思ひます」
(大正八年第十三号)

この結果、第五号から「赤い鳥」には、曲譜のついた童謡が紹介されるようになつた。そして、大正八年六月二十二日には「『赤い鳥』音楽会」が、大々的に開かれ、好評を博し、大正八年十二月には「赤い鳥童謡第一集」(曲譜付)が発行されるに至つた。

「『赤い鳥』音楽会」では、白秋の作品「あわて床屋」も歌われたが、その感想として白秋自身は次のように述べている。

(前略)あの曲の作者石川氏に申上げたいことですが、「あわて床屋」は、私の気持とは、可成相違してゐるやうに感じました。どうしても童謡は作曲しないで、子供達の自然な歌ひ方にまかせてしまつた方が、むしろ本当ではないかと思はれます。(大正八年第九号「通信欄」)

因みに、この白秋の考え方に對し、同じ「赤い鳥」の童謡作家の西条八十などは、童謡に曲譜を付けることについて、次のように述べている。

「かなりや」に就いての感想を申し上げれば、あの無邪気な少女たちが、眼を輝し、懸命になつて、自分の作を歌つてくれたことが、ただもう無条件に嬉しくて、忘れたい感銘を残しました。成田氏の作曲に関しては、更にもう少し静かな調べであれば、と作者として思ひましたが、勿論これは望蜀の感に過ぎません。北原氏の「あわて床屋」は一ばん少女たちにもよくはまり面白く歌へたであらうと思ひました。(大正八年第八号「通信欄」)

いい伴奏だけを弾いていたといつて、それを聞きながら、歌詞をぢつと見てゐて下すつたら、私の童謡の感じがほんたうに出はしないか、と、ふと私の空想で、そんなことを思ひました。(大正八年第九号「通信欄」)

このように、八十の場合は伴奏に合わせて童謡を歌うことについて、肯定的であつたことがわかる。

白秋の、曲譜を付けない自然な謡い方に任せるという童謡観は、大正八年の第三号に次のように述べられている。

(前略)無論童謡は歌ふ語でなければなりません。尤も謡ふと言つても唱歌のやうに作曲された上て謡ふといふのでなく子供心の自然の発露から、とりとりに自由に謡ひ出すといふ風なのが本當でせう。

この考え方が、實際に自分の作品に曲譜をつけられた結果、さらに強固なものとなり、大正八年第九号の通信欄に見られた主張を繰り返すことになつたと考えられる。

おわりに

以上、大正七年創刊号から大正八年第十二号までの期間の白秋の童謡観をまとめると、次のようになる。

- 一、童謡は芸術作品であるべきこと。
- 二、伝来の日本の童謡のもつ情緒、素朴さ、雅味を継承すべきこと。
- 三、大人くさがなく、子供の境地になりきつた、純粹で無邪気なものであること。
- 四、独創的であること。
- 五、童謡は作曲しないで、自然に流露した歌詞で口ずさむのが本當であること。

次に、変化した点については、次のようにまとめられよう。

「赤い鳥」に投稿された児童の作品に直接触れていくことによって、「童謡は子供たちのもの」「大人よりズツト本物」(大正八年第七号)という、現実の子供中心の考え方になつたこと。

「子供の境地になる」べきという考え方は以前と変わらないが、その「子供」の
とらえ方に変化があった。即ち、理想化され、概念化された「子供」から、現実
の「子供」のすばらしさに目が向けられていったわけである。

このような童謡観を抱いて、大人と子供の作品を区別し、選出・選評を大正十
年第十号まで続けたわけである。その後、大正十年第十一号より、子供の作品に
ついては「自作自由詩」という用語に変えて、選出、選評を行っている。この時
期において、どのような童謡観の変化があったのかを、次の稿で明らかにしたい。

注 引用は『白秋全集』（岩波書店 昭和五十年）による。以後、特に注記の
ない場合は、この岩波版『白秋全集』からの引用とする。

引用文献

「赤い鳥」復刻版 近代文学館

『白秋全集』 岩波書店 昭和五十九年

「『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号」 赤い鳥社 昭和十一年十月一日

参考文献

桑原三郎『赤い鳥の時代』 慶応通信 昭和五十年十月二十日

日本児童文学学会編『赤い鳥研究』 小峰書店 昭和四十年四月十五日

根本正義『鈴木三重吉と「赤い鳥」』 鳩の森書房 昭和四十八年一月

佐藤通雅『北原白秋——大正期童謡とその展開』 大日本図書株式会社 昭和

六十二年十二月二十日

平成三年七月 十九日 受付
平成三年八月二十六日 受理